

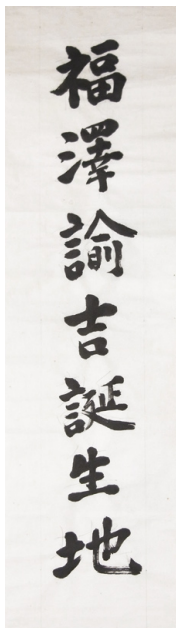
福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第13号 2010年12月31日 発行

目次

* 福沢研究センター公開講座……………	2	* 大阪展・展示報告……………	9
* 中津市アーカイブズ講座……………	5	* 主な新収資料……………	10
* 小泉信三書簡……………	7	* 主な動き……………	11
* 奥山春枝「日本作文」……………	8	* センター諸記録（2010年3月～9月）……………	12



* 小泉信三筆「福澤諭吉誕生地」 昭和28年（1953）*

この書（左）は、大阪堂島に所在する福澤諭吉誕生地記念碑の題字として、小泉信三（元慶應義塾長）によって揮毫されたものである。本年5月、大阪の慶應義塾出身者が組織する大阪慶應倶楽部より慶應義塾に寄贈された。

この字を刻んだ記念碑が完成したのは、昭和29年11月のことであった（写真右、人物は小泉信三）。しかしこの碑には、その前にも後にも大変な紆余曲折があった。

そもそも記念碑を建てる計画は、福沢が亡くなった直後の明治35年頃からあったものの、本格的な募金運動は大正7年から行われ、最初に碑が完成したのは昭和4年のことである。この時は犬養毅により「福澤先生誕生地」と揮毫された金属製の碑であった（写真中）。ところが、戦時中の金属供出によりこの碑は失われてしまう。

戦後、記念碑を再建しようと尽力したのは大阪慶應倶楽部である。資金面や土地所有者とのデザインをめぐる意見の相違など多くの困難を越えて、ハトをかたどった現在の斬新な碑を完成させたのは同倶楽部の人々の並々ならぬ熱意であった。

しかし碑はその後、移設や撤去を何度も繰り返した。ようやく現在の姿に落ち着いたのは平成19年12月のことである。本年はこの地に福沢が生を享けて、175年目であった。（都倉）

福沢研究センター公開講座

『近代日本と福沢諭吉』

塾長 清家 篤

福沢諭吉は、今から175年前の1835年、天保年間に生まれましたが、現代でも慶應義塾の学内だけではなく学外からも評価され、政治家やビジネスマン、研究者などが福沢の言葉をしばしば引用し、また福沢の論を基に自分の論を立てたりしています。

福沢の著書の中でも傑作と言われる『文明論之概略』の最初のほうではニュートンの話が、また『学問のすゝめ』ではガリレオやガルバーニを紹介するなど、福沢は自然科学を重視していたことがわかります。「物理学之要用」では、西洋の物理学、今日での自然科学と捉えてよいと思いますが、これは自然の原則を明らかにし、様々な応用を可能にするもので、学問の基礎であり他の学問とは同列に並べることはできないとしています。このことから福沢は人間の知性の発達は無限であり、科学の進歩により最終的にはすべてのものを説明できると信じたわけです。とにかく徹頭徹尾、人間の知性を尊んだ人だと思います。

福沢が自然科学を重視した理由の1つは、それが国の独立に関係すると考えたからです。明治維新前後の日本は、アヘン戦争後の中国のように西欧列強に占領されかねなかった。日本が西欧列強に対して弱い立場にあるのは、唯一科学技術の面で劣っていることにあったと考えました。国の独立とは、基本的には軍事力と経済力であり、それらは進んだ技術や産業に依存している。まさにそのもとが科学だったわけです。科学の発展度合の差が当時の西欧列強とアジアとの間の格差を生み、国の独立を脅かす背景になっていると考えました。

2つ目に、福沢は封建の江戸時代に生まれ、明治維新に至る幕末の激動期に成人して慶應義塾を作り、明治維新を経て近代の日本社会を教育家あるいは啓蒙家としてリードしました。明治維新を挟んで、それ以前と以降とではまるで違う日本になった。彼はこうした時代状況を『文明論之概略』の緒言で「恰も一身にして二生を経る」と、まるで一人の人間が二つの人生を生きたようなものと説明しました。今までの延長線上でものを考えたり、

問題を解決することが難しくなったわけです。そこで大切になるのが、自分の頭で考えることです。福沢は、『文明論之概略』の中で儒学では大きな変化の時代には困るという趣旨のことを述べています。そこで強調したのが「実学」だったのです。

儒学が虚学であるのに対し、実学は学問の対象としての実体がきちんと存在する。後に実学という言葉に「サイヤンス」というルビを振っていますが、福沢にとって実学の意味はまさに科学、特に実証科学だったわけです。研究の対象としての実体があり、それについて自ら立てた仮説を実験などによって検証する、それを実学と考えました。つまり実学とは、論理的かつ実証可能な学問であり、そこから一般的な理論や法則を導くことのできるものです。

『文明論之概略』には理論はできるだけ一般的でなければならない、いわゆる遠因の話も出てきます。科学的な一般法則を見いだせば、いろいろな応用問題も解けるという話です。水の沸騰と人の呼吸の近因は異なるように見えるが、遠因を探れば炭素と酸素の結合に至るという例などを出しています。大切なのは科学法則への正しい理解や科学的にものを考えることであり、それは人が自分の頭でものを考えるプロセスにほかなりません。つまりニュートンが力学体系を見つけた時にも、リンゴが木から落ちるのはなぜかという問題を見つけ、次に地球という大きな質量を持ったものとリンゴの間で引力が働き、非常に大きな質量を持った地球の方にリンゴが引き付けられるのではないかという仮説を立てた。それを様々な実験により検証し結論を得る。すなわち問題を見つけ、それについて仮説をつくり、誰もが納得する方法で検証して結論を導く。今までこうだったからというのではなく、なぜなのかという問題を見つけ、そのなぜがどうして起きているのかを考える。これを、例えば自然科学であれば実験、社会科学であれば統計などを使って検証する。あるいは人文科学であれば、様々な文献等を調査し検証して結論を導く。これこそ自分の頭でものを

考える、大きな変化の時代に求められている能力に外ならないと思います。

皆さんも、福沢の実学の精神、サイエンティフィックにものを考える能力を慶應にいる間にしっかりと身につけてください。これはどんな時でも役に立ちます。研究者になる人もビジネス界に出る人も、必ずいろいろな問題に直面しその問題を解決しなければいけない時がある。その時にその問題はどのようにして起きているのかという仮説をつくり、それを検証して結論を導く能力が必要になります。

ところで、このように福沢は『文明論之概略』の最初でニュートンを引き合いに出したり、あるいは遠因の話の中にいきなり酸素と炭素の結合の話が出てきたり、自然科学にもものすごく詳しい。どうしてなのか。これは私は自分ではなかなか分らなかったのですが、理工学部で永田守男先生がお書きになった『福沢諭吉の「サイアンス」』（慶應義塾大学出版会）という本の中にももしろいことが書いてありました。福沢は子どものころから手先が器用で、いろいろなものを自分でつくったりしていた。そういうことが大人になってから力学などに興味を持ったり、あるいはそういう学問を理解するのにとても役に立ったのではないかとっておられます。

もう一つ、これは私もそう思うのですが、やはり若い頃の教育、つまり福沢は一番多感な頃に大阪の適塾で学んでいます。適塾とは緒方洪庵の蘭学・医学塾で、医学や物理学などの自然科学を学んだことが良かったと思います。福沢は科学に強かったので、ちょうど今から150年前に咸臨丸に乗ってアメリカに渡り、その後は遣欧、遣米使節の一員としてヨーロッパやアメリカを旅行しましたが、自然科学の部分は書物を通じて知っていたため、汽車や工場、立派な建物を見てもあまりびっくりしなかった。むしろ根掘り葉掘り調べたりしたのは議会制度や裁判制度などの社会制度で、それらは自然科学と違い、本だけではうまく理解できないので、むしろ福沢にとってとても興味深かった。

そういう福沢がつくった慶應義塾は、実は自然科学をとても重視していました。物理学、自然科学をしっかり勉強するようにと塾生に強調しています。また福沢は自然科学とは別に、社会科学として経済学を重視しています。毎年5月に行われるウェーランド講演、これは戊辰戦争の折上野の山で戦争があった時、戦争はしていても日本に学問を絶やさぬよう慶應義塾は勉強するのだと、

ウェーランドが書いたテキストの講義を続けたことに因みますが、そのウェーランドの本は、まさに経済学の原書だった。福沢は『時事新報』の中で、経済学は学問としてはまだ後れている社会科学という分野の中では、自然科学にいちばん近い進んだ学問だと言っています。そういう面で福沢は経済学を重視し、慶應の中に大学を発足させる時に文学科、法律科と同時に理財科の3科を設置しました。理財は経済のことですが、経済学を講じる学部を日本で初めて大学と名の付くところで設けたのは、慶應義塾だと言われています。

自然科学あるいは科学を尊重する伝統は、慶應義塾に脈々と受け継がれ、伝えられています。今日でも日吉では文科系の学部学生に対し、実験を重視した自然科学教育が行われています。文科系であっても問題を発見し、仮説をつくり、検証して結論を導くことは必ず重要になりますが、そういう実学の体系を、実験を伴う自然科学により具体的に学んでもらおう、ということを慶應義塾では行っているのです。

自然科学あるいは実学というものを学ぶことのもう一つの重要性は、世の中の真実は結局のところ、学問を通じてしか分からないということを理解するところにあります。自分が見たもの、あるいは感じたものは、必ずしも真実ではない。経験や体験は大切だが、それらだけでは必ずしも真実は分からない。真実を知ることができるのは、必ずその真実を説明する学問を通じてであるということを、認識してほしいのです。はじめに福沢は人間の知性を徹頭徹尾重視した人だと言いましたが、福沢が学問を重視したことの一つの意味は、学問を通じて真実を理解する、経験主義を克服し、学問を通じて初めて世の中の真の姿が分かる、ということです。例えばプトレマイオス以来の天動説は広く人々に信じられてきた。これに対して、コペルニクスやガリレオ、ケプラーなどはそうではなく、地球のほうが自転して太陽の周りを公転していると唱えたわけです。このことは自然科学だけでなく、社会科学でもそうです。

私たちが実感や日々の体験とは違うものが真実だということを理解したことからケプラーの法則などが認められ、それに触発されてニュートン力学も生まれ、そのニュートン力学が最終的には産業革命を可能にし、今の我々の豊かな生活を可能にしています。私たちの先人たちが理性により地動説を理解できなければ、ニュートン力学も生まれなかったし産業革命も起きなかったかもし

れない。それによる今のような豊かな生活も営めなかったかもしれない。これが人間の知性の素晴らしさ、あるいは科学の偉大さですし、そういう伝統は慶應の中に脈々と根付いています。例えば経済学部で速水融名誉教授は、歴史を実証科学にした。歴史学はそれまではいろいろな解釈やイデオロギーに基づく議論が多かったのを、速水先生は特に人口に着目し、人口統計を使い、仮説、検証、結論という手続きとそれまでは直接的に結び付いていなかった歴史という学問を、統計資料により検証可能な科学にした一人です。その業績もあって去年、文化勲章を受賞されました。

あるいは生命科学研究の最先端で大活躍の富田勝先生が、山形県鶴岡にある慶應義塾の先端生命科学研究所にいます。彼は細胞をパソコン上につくり出すことに成功し、それが様々な実用的成果にも結び付いているわけです。速水先生にしても富田先生にしても、今までの学問の延長線上ではできないような研究について自分で問題を見つけ、仮説をつくり、検証し、結論を導くというプロセスをきちんと踏んで実現した。こういう研究者はある意味で私は慶應の学風が育むのだと思います。速水先生は60年ぐらいの研究生活の中で、三つぐらいの大きなテーマを20年ごとぐらいにやってきたと言っていますが、それは世知辛い、すぐに研究成果を求めるようなところでは、なかなか実現できない。慶應のような自由なところだからこそできたのではないかと思います。富田先生は山形の鶴岡にいて、当時の鳥居塾長に自分の好きな、おもしろいと思うことをやってくれと言われたのでそのようにしたところ、今の結果を導くことができたと言っています。

福沢先生自身も学者は自由にさせ、その中から何か一つ二つおもしろいものが出てくればいいのだと言っています。つまり、学者を放し飼いにしておきたいことをさせると、その中から一つ二つ、いい結果が出てくると。「元来学者の学を好むは酒客の酒に於けるが如くにして、傍より之を制す可らざるのみか、自から禁ずること能はざる所のものなれば、所謂飼放しは其勉強を促すの方便にして、俗界に喋々する規則取締等こそ真に学思を妨るの害物なりと知る可し」云々と言っておられる。もともと酒飲みが酒を飲むのが好きなのと同じように、学問をやるのが好きなのだから、勝手にやらせておけばいい。もちろん皆が皆、いい成果を上げるかどうかは分からないが、一つ二つでもおもしろいものが出てくれば良い。

そういうことが学者を飼い殺す、あるいは飼い放しにする楽しみなのだ。そういう学校をつくりたい、あるいはそれが自分の夢だということを言っておられます。さすがに今の慶應義塾はそれほどの余裕はありませんから、そこまでできるかどうか分かりませんが、できるだけそういう学風も福沢先生以来の伝統として守っていきたいと思います。

科学技術が今の我々の豊かな生活を可能にしていることは間違いありません。人口を増やすためには農業の技術革新もありますが、農業だけで維持できる人口は一定のもので人口は大きくは変わらなかった。それが産業革命が起き、一人の人間の作る生産量が飛躍的に増えることによって初めて人口が爆発的に増えるようになった。世界の人口は18世紀半ばぐらいから急速に増えてきています。

科学技術が生産性の向上を可能にし、それが人口の増加につながる社会の豊かさを可能にしたわけですから、社会の豊かさの基本は科学技術です。これは福沢の時代も今も同じです。だから、科学技術を振興する政策は非常に大切です。しかしどのようにして科学技術を振興させると社会が豊かになるかどうかは誰にも分からない。どんな技術、あるいはどんな発見が出てくるかは、研究者に任せるしかない。研究者が自分のおもしろいと思うことをひたすら自分の興味に従い、研究を行った結果、科学が進歩し、それが世の中の豊かさにつながっている。先ほど触れたように、慶應義塾もそういう自由な学風の中で科学の進歩に貢献したいと思っていますが、それと同時に必ずしも科学者になるわけではない学生の皆さんにも、いま言ったような科学の大切さをよく理解してもらいたいと思います。その上で、科学的にもの考えるプロセスは、どんな人にも必ず必要な、自分の頭でものを考える力を養うわけですから、そういう福沢の実学に基づいた科学的な思考能力をしっかりと身につけてもらいたいと思います。

私は福沢の研究者ではありません。しかし特に『文明論之概略』を中心として、福沢の科学重視に興味を持っていましたので、その点について今日は考えているところを少しお話ししました。

(本稿は日吉に新設された「近代日本と福沢諭吉Ⅰ」の中で2010年7月5日に行われた公開講座の抄録である。)

平成22年度 中津市アーカイブズ講座【博物館学実習】参加記

8月8日（日）から12日（木）まで、大分県中津市の市立小幡記念図書館で中津市主催のアーカイブズ講座が開かれた。昨年に引き続き、第2回目の開催になる。この講座は、大学生および大学院生を対象とした古文書の取り扱いや解読方法を学ぶためのものである。

中津市がこのような講座を開催することになったきっかけは、2007年に遡る。新貝正勝中津市長の表敬訪問を受け、当時の小室正紀福沢研究センター所長と森征一担当常任理事との会談が行われた。その席で新貝市長から、中津市と慶應義塾の協力で何か新しい教育事業ができないかという相談があり、それに対する小室所長の提案が大学生および大学院生向けの古文書の講座であった。

近年社会人を対象とした古文書講座は珍しくなく、中津市でもすでに行われていたが、大学生や大学院生を対象とした講座は、史学科のある大学で授業として行われるだけで他にはないと思われた。それでは実際には不十分で、史学専攻以外でも歴史を専攻する学生は多く、たとえば経済学部で経済史を専攻する、法学部で政治史や法制史を専攻するような場合には、古文書の扱いや読み方を正式に教えられる機会が非常に乏しい。研究を進めるうえで古文書を扱い解読できる力は必須であるにもかかわらず、よくわからないまま研究を続ける例も少なくなかった。そう考えると、機会の乏しい学生を対象に古文書の講座を開始することは、大変意味があるということになった。

しかしながら、福沢研究センターは当時創立150年記念の出版物『慶應義塾史事典』や『福澤諭吉事典』の刊行、全国4か所での展覧会の実施を控え、協力できるのは2011年以降になろうという話にまとまった。ところが2008年に慶應義塾は中津市と相互連携協定を結んだため、にわかに具体化し2009年度からの実施が決まった。そこで別府大学の針谷武志教授に協力を仰ぎ、まず別府大学がアーカイブズ歴史資料調査実習の一環として、中津市の福沢記念館で実施することになった。残っている福沢家の襖を利用し、2009年8月6日（木）から10日（月）まで、別府大学の丑木幸男教授と針谷教授の指導のもとで、下張りを剥がし目録にとる作業を中心に講座が行われた。福沢研究センターからは、西沢が下張り文書を読み解く背景として必要な中津士族社会と福沢諭吉に関する話を3時間（2コマ）行った。この時剥がされた文書には、福沢の叔父渡辺弥市に関するものが多くあった。

今年度はさらに久留米大学が博物館学実習として加わり、学生23名、TA（Teaching Assistant）6名の大人数になり、福沢研究センターからも調査員3名と学部学生1名の4名が参加した。教員も増え、講義は丑木幸男教授の「アーカイブズとアーキビスト」に始まり、西沢「福沢諭吉と中津士族社会」、資料修復家尾立和則氏「襖下張り文書整理法」、ヴォルフガング・ミヒェル九州大学名誉教授「江戸期における中津藩の国際交流について」、吉田洋一久留米大学准教授「中津藩の儒学」の5コマが実施され、大変充実したものになった。（西沢）

参加記

八月に中津でアーカイブズ講座が開催されるので参加希望者は申し出て欲しい、という話を初めて聞いたのは、四月の調査員会議のときだった。中津へは一度行ってみたいと思っていたので心を動かされたが、まだ先のことからとしばらくは申し出でずにいた。しかし、講座が近づいてきたある日、西沢さんから直々に誘いを受け、メンバーに加わることにした。

私用のため八日の夜遅くに中津入りした私は、九日から講座に参加し、四日間、別府大学と久留米大学の学生さんと一緒に史料のカード取りをした。学生諸君は大半が既に古文書の手ほどきを受けていたので、共同作業するのに苦勞を感じなかったが、それでも四日間で整理できた古文書は二十点余りに止まってしまった。来年また参加する機会があれば、少なくともこれを上回る量の史料を整理したいと思う。

講座終了後、一人で福沢諭吉旧居を見学した。邸内と隣接する記念館の見学を終え建物を出ようとすると、入口にあるテレビから本年一月に逝去された西川俊作先生（元福沢研究センター所長）が福沢について解説する映像が流れていた。西川先生に直接ご指導いただく機会はなかったが、このようなところで「再会」したことに不思議なものを感じつつ、徒歩で中津駅へ向かった。

（堀：TA）

アーカイブズ講座は、福沢旧居から発見された襖の下張りに用いられていた文書の目録作成のほか、襖の下張りを剥がし、文章を取り出していく作業や各教員による講義が行われ、実践と知識両面にわたる充実した内容であった。

目録を作成した古文書は殆んどが断簡であったもの

の、中には英学校のものと思しき金銭出納帳や、明治期に旧中津藩主奥平家が帰郷する際に作成されたと思われる行程表のほか、福沢家に送られた書簡などが含まれていた。これらの貴重な史料を活用することで中津と福沢家の関係についてもより明らかになるのではないだろうか。それゆえ、今後、福沢旧宅史料の目録情報を中津市と共有することが出来れば、福沢研究センターでも有効な活用を期待できる。今回、中津で扱った史料は襖の下張りという性格上、個々の文書の復元は難しいといえるが、今後は目録の作業と並行して、内容の理解や検討が課題であろう。

また、襖の下張りを剥がす作業は、尾立和則先生の指導のもと行われた。この作業のほか、大和糊による史料修復方法についても学ぶことが出来た。史料修復の手法や福沢旧宅蔵史料の発見などは今後の福沢研究センターでの作業においても史料に破損が生じた場合、大いに活用できるものであった。

今回の中津での講座は、別府大学や久留米大学の院生・学部生と接することが出来、古文書の読解や研究談義に花が咲き、非常に充実した合宿となった。

(大庭 :TA)

古文書講座に今回初めて参加したが、最初は「襖の下張文書」と言われても何のことだかよく分からないという状態から始まった。それゆえ、過去に修復のため襖の内側に不必要となった文書が張られ、それが現在は貴重な歴史史料として再発見されているという事実はとても新鮮で興味深く学ぶことができた。講座が終わってから別の場所で襖を見かけると、中に文書が眠っているかもしれないなどと考えてしまう程であった。実際に襖から文書を剥がす作業は担当しなかったが、剥がされた文書を読むなかでも、断簡や雑多な書付が多いことから当時どのようなものが下張りに使われたのかを感じ取ることができた。講座の参加者は私を含め古文書に不慣れな学生が多く、意味のとりにくい文書を読むのは大変で苦労したが、それでも毎日文書に接し、日によっては撮影したものを宿舍まで持ち帰って、夕食後にも目録取りを行うなど作業に没頭することで次第に慣れていった。

また実習以外の場面でも学生同士で交流する時間が多くあり、楽しく過ごすことが出来たのも充実した講座になった一因であった。今回は受講生として参加したが、今度は TA として参加して貢献したいと思わせられるような良い刺激を受ける機会となった。

(横山)

いままでアーカイブズとは縁遠い私であったが、福沢諭吉の生まれ故郷である中津ならびにアーカイブズにとっても興味があったので、自ら志願して本講座に参加した。本講座には慶應義塾大学の他にも久留米大学と別府

大学が参加し、ほどよい緊張感の中講座が始まった。

講座ではセミナーと実習の両方が行われた。その中で最も印象に残ったのが、襖の下張り文書の解体作業であった。襖の下張りとは襖や屏風の下地にされていた廃棄文書などのことを指し、それは当時を知る貴重な手がかりになるのである。いざ作業を始めると、慎重かつ大胆な手先の動きを要求される解体作業は想像以上に難しく、非常に神経を使う作業であった。時には文書を傷つけそうになりながらも、尾立和則先生の指導の下、何枚かの下張り文書をはがすことができた。また、普段接する機会の少ない九州の大学生とのふれあいも貴重な経験となった。そこでは互いの学生生活などについて語り合い親睦を深めた。

今回の講座は短期間であり時間に制限があったものの、アーカイブズの奥深さと面白さを肌で感じることができ、私にとって大変有意義な時間を過ごすこととなった。

(川野)

最後になったが、この講座は中津市のスタッフの多大な尽力によって成り立っている。特に中津市歴史民俗資料館の平田由美氏および竹内奈央氏には大変お世話になった。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

(文責：西沢直子 堀和孝 大庭裕介 横山寛 川野広貴)



「小泉信三書簡 岩波茂雄・小林勇宛 全百十四点」

たけ だ こう し
竹 田 行 之
(岩波書店社友)

福沢諭吉は格別に筆まめだったが、小泉信三も筆まめな人であった。福沢は『書簡集』に2564点あり、没後110年の今なお新しく出るものがある、おそらく1万点を超す書簡をしたためたであろうとは富田正文氏の推定である。

『小泉信三全集』では第25巻「書簡篇」が上下2冊で1807点、古書展に未収録書簡が出ることもあり、戦災による消滅と、ペン書きが殆どで書簡一般に紛れやすい事情などを考えると、実際は既発表の倍をかなり上回るものがあったろうと私は推定している。電話の普及とともに筆をとる機会が少なくなってくる時代である。

「全集」は富田正文、茅根英良両氏のお仕事である。丹念を以て知られたおふたりのこと、行き届いた校訂注解であることは申すまでもない。そのような書簡篇であるが、ただひとつ憾みとされてきたのは岩波茂雄宛書簡が1点にとどまっていることであった。

事情は岩波書店の側にあった。有名無名の発信者から茂雄宛到来書簡で保存されている点数は2万数千点と膨大なものである。「小泉全集」当時は整理作業の着手以前で、どこに何があるやらとても見つけだすことは出来ませんのでと富田さんにご容赦を願った経緯があり、書店側にも心苦しい思いが残った。作業完了一部公刊となったのは2003年である。

2006年、この年は岩波茂雄が没後60年、小泉信三が40年、小林勇が25年と没後の記念が重なった年であった。そこで思い立って岩波書店を訪ね関係書簡の閲覧を願い出て許され、コピー提供を受けることができた。また小松美沙子さん（小林勇長女）の手許にある小泉書簡も全点見せて頂いたうえでコピーを頂戴した。こうして入手できたのが、岩波茂雄宛62点、小林勇宛52点で、このうち岩波宛61点、小林宛13点が全集未収録の新出書簡である。岩波、小林を一括して編年体を採り、戦前戦後の2編にわけた。このかたちをとったのは書簡が時

代の出来事と分かちがたく結びついているからである。富田、茅根の成果を尊重しつつも各書簡の直後注を一新、参考書簡や補注（ひと・こと）などを加えて改めて編纂しなおした。

石河幹明著『福沢諭吉伝』を嚆矢として、『続福沢全集』、『福沢諭吉全集』の福沢著作編纂は「慶応義塾蔵版／岩波書店刊行」のかたちをとっている。福沢自撰の単行本全集化の明治版全集あるいは大正版全集は時事新報社／国民図書株式会社の編纂や発行であるが、衰運をたどっていたとはいえ時事新報社が株式会社として存続していた昭和初期の時点においてなぜこのような変換がはかられて今日周知の態勢になったのか。私のかねての疑問は今回の新出書簡で解かれた。動きは関東大地震直後に始まり、事は「独立自尊の町人道を教えられた福沢諭吉先生」への岩波茂雄の熱誠に発している。小泉がそれに応えて動き、富田、小林も加わる4人の協力が戦前、戦中、戦後の福沢著作編纂の事業を駆動させた。

慶応義塾と岩波書店の協力は福沢著作にとどまらない。『経済学古典叢書』の刊行があり、小泉の斡旋によって世に送りだされた書も多い。『水上瀧太郎全集』もそうである。さらには幸田露伴、安倍能成など昭和前期の＜知の共同体＞での人々の交流が語られている。

「岩波さんへも小林さんへも父の手紙のなかでも父らしい手紙です」とはこれらの書簡に目を通された小泉妙さん（次女）が洩らされた感想である。親しい友への語りかけは建前ではなく本音で語られる。軍国主義が時代の風潮になり、5・15以降は暗鬱な空気がこの国を覆い軽々に本音をもらすことが出来ない世にあって、岩波も小林も本音で語りあい奥底の感懐を吐露できる相手であった。全114点、まことの友情とはいかなるものであるかを示す書簡の数々である。人としての小泉信三を知る基本史料であることは言うまでもない。

（本書は慶応義塾福沢研究センター近代日本研究資料(9)として2010年3月に刊行された。）



塾史研究が忘れていた福沢門下生 奥山春枝について

さか い たつ ろう
坂 井 達 朗

(福沢研究センター顧問・名誉教授)

正確な日時を確認することも不可能ではないが、その必要もないと思うから、おぼろげな記憶を頼りに書くことをお許し願いたい。今から七八年前のある日、筆者は奥山篤信という未知の方の来訪を受けた。氏はその時福沢の書幅一点を示され感想を求められたのであった。拝見すると「贈医」と題された福沢の漢詩で、福沢自身の手跡に紛れもない。箱書きには奥山春枝と言う署名入りで、明治26年7月、慶応義塾卒業の際に福沢先生から贈られた旨が記されている。

早速入社帳、勤惰表、塾員名簿などを調べてみると、山形県上山出身で、卒業後は関西の金融界で活動した人物であることがわかった。篤信氏の祖父に当られると言う。奥山家は現在は東京に住まれるが、先代までは大阪と神戸の中間、武庫郡住吉村（現神戸市東灘区住吉東町）に居られ、関東大震災は勿論、第二次大戦の戦災にも、また近年の阪神淡路大震災にも被害に遭わず、春枝氏の遺品多数を所持されるという。このお話を伺って筆者は内心小躍りするのを抑えられなかった。

というのは、その数年以前から、当センターでは、福沢門下生の地方での活躍を発掘する共同研究をつづけており、北海道から九州まで各地をたずね、それまでの塾史研究の網の目から落ちていた塾員の活動を明らかにする努力を重ねて来ていた。その結果つい東京中心になりがちであった眼に、それまで触れていなかった多くの新事実が見えてきていたのであった。その時の筆者の想いを、一言で表現すれば、これこそ我々が求めてきたものだということの感慨であった。

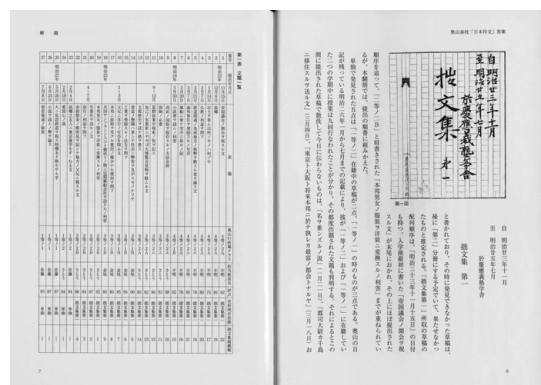
篤信氏が筆者を訪ねられたもう一つの目的は、春枝氏に関する史料をどのように処分するのがよいかという御相談であった。篤信氏のご長男は当時塾の大学院理工学研究科に在学中であったが、家に伝わる史料には関心が薄く、今後のことが気がかりであるということであった。その時筆者がおこなった提案は、分類整理の上で、

塾員に関する史料として当センターに寄託されてはどうかということであった。

幸いにもこの案は篤信氏の快諾される所となり、以後数年にわたる春枝氏と筆者とのつきあいが始まった。美事な手跡を持ち、几帳面な性格の春枝氏は学生時代から克明な日記をつけており、その一部は今日も残っている。とくに卒業前後のものは当時の学生・若い卒業生の生活を如実に表しており、それを通じて我々は当時の塾生の勉学の有様、福沢本人や学校に対する態度、交友関係のあり方、政治や社会に対する関心、卒業後の生活設計、故郷に対する想いなどを知ることができる。

卒業後は一時通信省鉄道局に勤務した春枝氏は、その後金融界に転じ、日本銀行、名古屋銀行、鴻池銀行、藤本ビル・ブローカー等をへて、大阪でビル・ブローカーとして独立し、日本資本主義の発展ともに、日本におけるこの業種の草分けの一人に成長していく。遺品は全体として日本資本主義の成立過程を一人の若者の成長を通して明らかにする好個の史料であると言える。

今回その自由な使用を許された筆者は、その一生を辿り、その中で彼が若い日に慶応義塾に学んだことが持つ意味を考えた『評伝奥山春枝 近代起業家の誕生とその生涯一』を福沢研究センター叢書の一冊として出版していただくことが出来た。また遺品の中に纏めて残されていた「日本作文」という授業に課題として提出した答案27編を『奥山春枝「日本作文」答案』（慶應義塾福沢研究センター資料12）として、翻刻した。当時の学生生活と、明治・大正・昭和戦前期の福沢門下生の生き方を知り、その時代を理解する手がかりにして頂ければ幸甚である。



(慶應義塾福沢研究センター資料12より)

未来をひらく福沢諭吉展 大阪展・展示報告

と　　くら　　たけ　　ゆき
都　　倉　　武　　之
(福沢研究センター専任講師)

全号に引き続き、2009年7-8月開催の大阪展において追加展示された資料の一覧を記録として掲げる。なお、福岡で追加し、引き続き大阪で展示したものは省く。

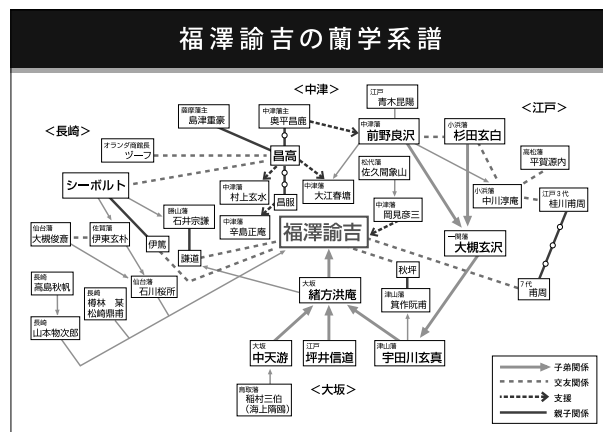
□福沢と関西の人々

- ・ 1-OS-01 福沢諭吉「道中日記」／明治22年
関西方面を訪れた際の福沢の日記。
- ・ 1-OS-02～03 福沢諭吉宛還暦祝状（緒方惟準／
大谷光瑩〈東本願寺法主〉）／明治28、9年
関西縁の人物からの還暦祝い状。
- ・ 1-OS-04 福沢諭吉「本来無一物とは云ひながら」
書幅／西川隆夫氏／明治33年
最晩年の人生観を記した書幅。
- ・ 1-OS-05 大阪慶應義塾同窓会電報／明治34年1月31日
福沢の脳溢血再発に対する見舞い状。
- ・ 1-OS-06 弔電（神戸慶應義塾同窓会）／同2月4日
- ・ 1-OS-07 弔電（京都・同志社 広津友信）／同5日
関西方面からの福沢への弔電。
- ・ 1-OS-08 弔辞（長与専斎）／明治34年2月
長与は適塾以来の福沢の親友。
- ・ 1-OS-09 大谷光尊（西本願寺法主）「大観」墨書
明治34年2月18日 福沢の院号の書。
- ・ 1-OS-P01～02 福沢死去を報じる『神戸又新日報』
／『山陽新報』／明治34年2月5日

□原点としての大坂

- ・ 3-OS-02 『易経集註』（伊藤東涯書入写）／寛文4年
福沢が父の蔵書を処分した際も手許に残した書。
- ・ 3-OS-03 「福沢氏古銭配分之記」・古銭／明治11年2月5日
福沢が子に分けた父の収集品と由来書。
- ・ 3-OS-P01 福沢諭吉誕生地記念碑
- ・ 3-OS-06 『重訂解体新書』（福沢諭吉書入）／慶應
義塾図書館／文政9年
「卓見」などと書き入れがある。
- ・ 3-OS-07 緒方洪庵肖像（洪庵自賛 複製本）／大阪・
洪庵記念会／原本：文久2年
- ・ 3-OS-08 福沢諭吉「適々豈唯風月耳」書幅／大阪大学
- ・ 3-OS-09 緒方洪庵遺品 扇面時絵文箱
洪庵遺品として福沢の子孫宅に伝わったもの。
- ・ 3-OS-10 『病学通論』／大阪・適塾記念会／嘉永2年
- ・ 3-OS-P02 緒方洪庵・八重夫妻墓所

- ・3-OS-11 緒方御隠居様遺髪高林寺合理法事廻状
／大阪・適塾記念会／明治19年
賛同者に福沢も記名。
- ・パネル 福沢諭吉の蘭学系譜／緒方洪庵と福沢諭吉／適塾の同窓生たち／大阪における福沢諭吉の足跡



□大阪・京都・徳島の分校

- ・ 3-OS-13 慶應義塾分校設立願（大阪分校）／明治6年10月
大阪慶應義塾設立の際の願書。
- ・ 3-OS-14 大阪慶應義塾入社帳／慶應義塾図書館
明治6-7年 大阪慶應義塾用の入社帳。
- ・ 3-OS-15 大阪慶應義塾教授記録／明治7年
- ・ 3-OS-16 慶應義塾分校設立願（徳島分校）／明治8年7月
大阪慶應義塾が移転して開設された徳島慶應義塾の設立願書。
- ・ 3-OS-17 「京都慶應義塾之記」／明治7年
京都慶應義塾の規則集。
- ・ 3-OS-P03~05 大阪慶應義塾跡記念碑／京都慶應義塾之碑／徳島慶應義塾記念碑

□関西の福沢山脈・福沢人脈

- ・ 3-OS-18 福沢諭吉 白洲退蔵宛書簡／明治13年10月24日
福沢が信頼した旧三田藩出身の白洲に宛て、経営難の慶應義塾の廃塾に言及する。
- ・ 4-OS-01 福沢諭吉「京都学校の記」／明治5年5月6日
京都において地域と協力する理想的な学校運営を目標とした福沢が感激の中に記した一文。
- ・ 4-OS-02 福沢諭吉 白洲退蔵宛書簡／明治10年11月26日
神戸滞在中の福沢が記した書簡。
- ・ 4-OS-03 福沢諭吉 福沢一太郎宛書簡／明治17年5月27日
和歌山の有力者浜口梧陵を紹介する書簡。
- ・ パネル 関西周辺における福沢山脈・福沢人脈

❖ 主な新収資料

平成22年3月から平成22年8月までの間に福沢研究センターに収蔵された資料のうち、主なものを紹介します。この他にも多くの方々から資料をご寄贈いただきましたが、すべてをご紹介することができず、申し訳ありません。

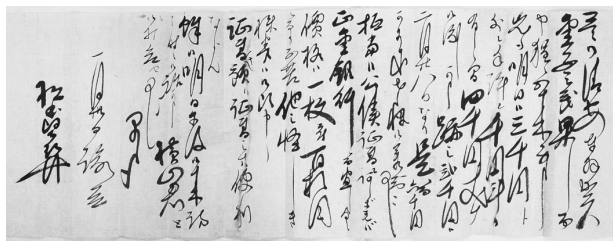
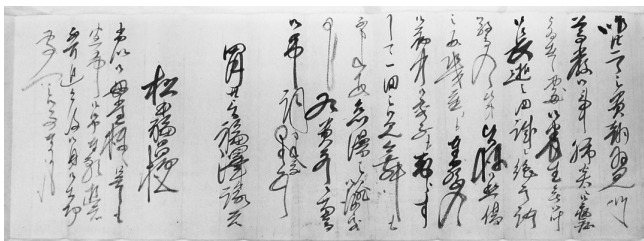
＊物故者の敬称は略させていただきました。

福沢諭吉・松本福昌関係資料

慶應義塾大学文学部の卒業生で長く慶應義塾に勤められた川上清子氏から、亡父川上刀根五郎旧蔵の福沢諭吉および慶應義塾関係資料をご寄贈いただきました。刀根五郎の義父にあたる松本福昌にあてた福沢の書簡や写真、松本福昌の卒業証書などです。

松本福昌は、安政4（1857）年に小田原藩士松本福孝の長男に生まれ、明治9（1876）年4月に慶應義塾に入塾、11年12月に卒業したのち、竹田簿記学校で学びました。横浜で事業も行ないましたが、13年からは国会開設運動に没頭し、足柄下郡総代として相模地方の自由民権運動をリードしました。13年6月に元老院に提出された相州の国会開設建言書（国会開設の儀に付建言）は、筆頭に松本の名があり、松本の斡旋で福沢が起草したといわれています。大正4（1915）年10月10日に亡くなりました。

- 松本福昌宛福沢諭吉書簡 明治15年1月30日付 貸付金6000円のうち4000円を明日渡すことを知らせるもの。
- 松本福昌宛福沢諭吉書簡 明治15年10月16日付 至急の来訪を乞う。
- 松本福昌宛福沢諭吉書簡 明治17年4月23日付 松本の父の病死に対する悔み状。



- 福沢諭吉肖像写真 明治15年 裏面に松本福昌宛献辞。
- 慶應義塾卒業証書 明治11年12月27日付 福沢諭吉の署名あり。
- 松本太郎宛犬養毅書簡 大正4年10月13日付 松本の息子に対し父福昌死去に対する悔み状。

福沢諭吉・時事新報関係資料

- 明治21年6月12日付時事新報社説「医説」 福沢諭吉自筆原稿

【購入】

吉田小五郎関係資料

【吉田直一郎氏寄贈】

新潟県柏崎市の黒船館より、吉田正太郎・小五郎関係資料をご寄贈いただきました。吉田正太郎・小五郎兄弟は、ペリー来航以降近世から近代への転換期のさまざまな資料を収集し、黒船館はそのコレクションを展示しています。しかし2007年の新潟県中越沖地震の被害を受け、収蔵施設を縮小されるため、今回吉田小五郎の資料を中心にダンボール9箱分の資料をご寄贈いただく運びとなりました。吉田小五郎は長く幼稚舎で教鞭を執り、昭和19（1944）年から20年にかけて行われた疎開では責任者を務め、また戦後22年から31年まで幼稚舎長を務めました。資料は書簡、原稿、写真、図書などで、現在資料整理を進めています。

学生関係資料

- 久達郎卒業証明書・成績証明書・身体証明書 計4点

【ヒサクニヒコ氏寄贈】

久達郎は『三田評論』にマンガ「何でも劇場」を連載されているヒサクニヒコ氏の父。昭和10年経済学部卒業。ヒサ氏の母が大切に保管していたもので、母堂の遺品については『三田評論』2010年8・9月（1137号）に、ヒサ氏の「仕分け」と題するエッセイが掲載されている。

■ 福沢研究センター資料・叢書の刊行

3月に福沢研究センター資料12として、坂井達朗福沢研究センター顧問の解説を付して奥山春枝「日本作文」答案』を、10月には坂井達朗著『評伝 奥山春枝』を福沢研究センター叢書第3巻として刊行した。

■ ワークショップの開催

近世近代研究交流会との合同でのワークショップを2回、福沢研究センター単独のワークショップを2回、開催した。なお、その中の1回は、調査員を対象として、資料整理に関する内容で、合宿形式で行われた。

■ 福沢センター講座の増設

日吉に「近代日本と福澤諭吉Ⅰ」を春学期に新設し、従来の「近代日本と福澤諭吉」を「近代日本と福澤諭吉Ⅱ」とした。これまで日吉では、春学期に講座が設置されておらず、入学してすぐの学生の福澤諭吉への関心に十分に答えられていなかった。そこで、専任所員が担当する講座を新設し、清家篤塾長、長谷山彰常任理事、服部禮次郎福澤諭吉協会理事長、橋本五郎読売新聞特別編集委員をゲスト講師として招き、履修者以外にも公開した。

■ 大阪での福澤諭吉生誕175年記念式典

7月16日に行われた記念式典会場で、小泉信三直筆の書「福澤諭吉生誕地」などの展示を行った。

■ 中津市の古文書講座

昨年に続き、夏休みに中津市で古文書講座が開催されたが、西沢直子教授が講師と参加するだけでなく、本年度からは調査員が受講生として参加し、福沢に関わる文書の実習を行った。

■ 大阪での福沢研究センター講座

一昨年から行われている大阪リバーサイドキャンパスの福沢研究センター講座を、本年度も開催した。本年度は「福澤諭吉とその時代」をテーマに、9月4日より1月29日まで6回の講座の予定である。

■ 所長・副所長の重任

所長・副所長は2年間の任期が9月30日で切れたが、次期も重任となった。任期は、2012年9月30日まで。

■ 『福澤諭吉事典』の編集状況

原則、月に一度の編集委員会の開催、さらに3月と8月には合宿も行い、『福澤諭吉事典』の編集が進められ、12月24日に刊行されることになった。なお、総ページは、予定よりも約100ページ増えて、1164ページとなった。

福澤諭吉事典

主要目次

438項目におよぶ「Ⅰ 生涯」と、239人の福澤関連人物を取り上げた

「Ⅱ 人びと」、カラー図版で肖像写真・肖像画・墨跡・遺品を紹介した

「Ⅵ 表象」などにより、福澤諭吉の全体像が浮かび上がります。

現代の課題に通じる多くの知見に溢れた、画期的な個人事典です。

- I 生涯
 - 1 生い立ち 2 蘭学修業 3 英学への転換 4 文明の始造
 - 5 建置経営 6 晩年 7 日常と家庭
- II 人びと
- III 著作
- IV 漢詩
- V ことば
- VI 表象(カラー)
- VII 書簡宛名一覧
- VIII 『時事新報』社説・漫言一覧
- IX 年譜
- X 基本文献

定価[税込] 14,700円

ご注文先：慶應義塾大学出版会
〒108-8346 東京都港区三田2-19-30
TEL: 03-3451-3584 FAX: 03-3451-3122



福沢研究センター諸記録 (2010年 3月～ 9月)

■ 諸会議

- * 平成21年度第3回運営委員会 (3月9日)
- * 平成22年度第1回運営委員会 (6月30日)
- * 平成22年度第1回センター会議 (5月28日)
- * 第8回創立150年記念誌刊行委員会 (6月25日)
- * 小泉基金運営委員会 (7月21日)
- * 『近代日本研究』第27巻編集委員会 (7月29日、9月29日)
- * 『福沢諭吉事典』編集委員会
合宿 (3月28～30日、8月24～26日): クロスウェーブ東中野
第30回 (3月4日)、第31回 (3月28日)、第32回 (4月27日)、
第33回 (5月27日)、第34回 (6月22日)、第35回 (7月28日)
- * ワークショップ
・ <近世近代研究交流会との合同開催>
「江戸の公共空間と支配管轄」
報告者: 松本剣志郎氏 (世田谷区立郷土資料館)
「20世紀前半期 東京市における資源循環の変容
―塵芥処理、尿処理の事例を中心に―」
報告者: 星野高德氏 (福沢研究センター調査員)
(3月7日)
「海保青陵における『世ノ移変』と『民』」
報告者: 青柳淳子 (慶應義塾大学大学院経済学研究科)
「明治期日本の国民道徳と仏教」
報告者: 繁田真爾 (早稲田大学政治経済学術院)
(9月26日)
- ・ 「資料整理の方法について」 <合宿>
講師: 田中康雄氏
(元群馬県立文書館館長、福沢研究センター研究嘱託)
(3月26～27日)
- ・ 「福沢諭吉の人間観と進化生物学」
講師: 坪川達也氏 (法学部専任講師) (4月21日)

■ 人事

- <専任所員>
昇任 西沢直子 教授 4月1日～
- <所員>
退任 岩崎 弘 君 ～3月31日
- <顧問>
新任 岩崎 弘 君 4月1日～
- <研究嘱託>
退任 遠山隆淑 君 ～3月31日
新任 石井寿美世 4月1日～
- <非常勤嘱託>
退任 石井寿美世 ～3月31日
復職 坂井博美 4月1日～

■ 展示協力・見学受入

- * 鳥取市歴史博物館、資料借用 (3月12日) および返却 (5月14日)
- * 法政大学キャリアデザイン学部笹川ゼミ22名の見学案内 (5月28日)
- * 松山市立子規記念博物館、資料借用の相談 (6月1日)、貸出 (7月20日)、返却 (9月2日)

■ 主な来往

- * 韓国 KBS 放送、資料及び展示室撮影 (5月21日)
- * 朝日新聞、取材対応 (6月8日)
- * TBS テレビ、皇室番組の取材対応 (8月23日)、同番組で使用する資料撮影 (9月28日)

■ 出張・見学

- * 都倉講師、赤堀係主任、横山調査員、資料整理、資料調査のため新潟県柏崎市へ出張 (3月15～16日)
- * 米山所長、西沢教授、資料展示替えのため中津の福沢記念館を訪

- 問、翌日理事会 (米山所長)、評議員会 (西沢教授) に出席 (3月23～24日)
- * 西沢教授、資料調査のため小倉 (5月11日)
- * 西沢教授、旧邸保存会評議員会に出席のため中津 (5月12日)
- * 都倉講師、大阪慶応倶楽部の総会に出席、資料寄贈について報告 (5月14日)
- * 赤堀係主任、第103回全国大学史資料協議会東日本部会幹事会、東日本部会2010年度総会に参加のため、愛知大学豊橋キャンパス (5月20日)
- * 都倉講師、日本写真学会にて、写真修復家の白岩洋子氏と共にポスター発表 (東京工業大学) (5月27日)
- * 都倉講師、赤堀係主任、吉祥寺の個人宅訪問、資料を借用 (6月7日)
- * 赤堀係主任、DNP デュアルシーブ・セミナーに参加 (6月10日)
- * 米山所長、東洋大学井上円了センター運営委員会に出席 (6月11日)
- * 都倉講師、韓日文化交流基金主催のシンポジウム「1910年-その以前100年: 韓国と日本の西洋文明受容」に参加 (6月11～13日)
- * 赤堀係主任、東海大学学園史資料センタースタッフ2名とともに国立公文書館高山館長を訪問、全国大学史資料協議会の研究会への協力依頼 (6月15日)
- * 都倉講師、授業受講者を対象とした日吉台地下壕見学会 (7月1日)
- * 酒井事務長、赤堀係主任、国立公文書館を見学 (全国大学史資料協議会東日本部会研究会) (7月13日)
- * 米山所長、都倉講師、酒井事務長、大阪にて 福沢生誕175年記念式典・講演会及び大阪慶応倶楽部創立80年記念祝賀会に出席 (7月16日)
- * 西沢教授、福沢研究センター調査員堀、大庭、横山、川野、古文書講座に参加 於: 大分県中津市立図書館 (8月8日～12日)

■ 講師派遣

- * 都倉講師、全国大学史資料協議会東日本部会研究会第70回研究会にて「大学史研究と資料展示～福沢諭吉展を通して～」と題して講演 (3月18日)
- * 西沢教授、中部で特別授業 (4月10日)
- * 西沢教授、SDM 研究科2010年度入学合宿で「福沢諭吉と慶応義塾」と題して講演 (4月25日)
- * 松崎欣一顧問、福沢先生ウェーランド経済書講述記念講演会『福翁自伝』の成り立ちについて一晩年の福沢諭吉 (5月14日)
- * 西沢教授、日吉教養研究センター設置講座で講義 (5月17日)
- * 都倉講師、沖縄通信三田会40周年記念講演会で「福沢諭吉生誕175年」を担当 (5月29日)
- * 都倉講師、神戸慶応倶楽部例会で講演: 「福沢諭吉と関西」 (6月17日)
- * 岩谷副所長、相模原三田会総会において「福沢先生生誕175年」と題して講演 (6月19日)
- * 都倉講師、三田史学会のシンポジウムで「アジア・太平洋戦争と慶応義塾」の題でコメント (6月26日)
- * 米山所長、大阪リバーサイドキャンパスセンター講座において「福沢諭吉生誕175年」と題して講義 (9月4日)
- * 都倉講師、渋沢栄一財団主催のシンポジウム「関東 (関八州・宇都宮) と近代日本社会のリーダーたち」にパネリストとして参加 (9月8日)

■ 訃報

- * 文学部中川純男教授 (文学部長、センター運営委員) 逝去 (4月9日)

■ その他

- * 平成22年度福沢研究センター設置講座ガイダンス 三田 (4月5日)、日吉 (4月6日)
- * 西川俊作名誉教授 (センター顧問、元所長) を偲ぶ会 (7月24日)

慶應義塾福沢研究センター通信 第13号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2010年12月31日 (年2回刊)
編集 慶應義塾福沢研究センター
発行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1603
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印刷 (有) 梅沢印刷所